

火のある風景描画法を「読む」ためのヒント(Ⅰ)

—火のもつ象徴的意味について—

石田 弓 1)

Hints for Understanding “Fire in Landscape Technique” (Ⅰ)

About the symbolic meanings of “Fire”

Yumi ISHIDA 1

Department of Psychology, University of Tokushima

ABSTRACT

Prior to understanding the inner worlds of clients by using “Fire in Landscape Technique” (FLT), which the author has developed, we need to clarify various symbolic meanings of “Fire.” In this paper, several such meanings are examined by referring to the collected notions of “Fire” in the fields of folklore, cultural anthropology, religion, psychology, and philosophy.

As a result, some historical and universal associations between “Fire” and our inner worlds are revealed. In particular, the following three features, “Bilateral Character of Fire” (e.g., Sexual drive vs. Aggressive drive in psychoanalysis), “Fire as the Instrument of Change” and “Fire as the Conversion Agent,” are found to reflect our various inner experiences. In addition, these symbolic meanings of “Fire” are found as well in the themes of clients’ drawings collected in FLT. Finally, the present paper suggests a useful application of FLT to the field of clinical psychology, more specifically psychological assessment and psychotherapy.

Key Words : the symbolic meanings of “Fire”, Bilateral Character of Fire, Fire as the Instrument of Change, Fire as the Conversion Agent

1. はじめに —なぜ「火」を描くのか—

臨床描画法は投映法の1つであり、描き手のパーソナリティ特性や心の無意識的領域からのメッセージが描画のなかに視覚的・非言語的なかたちで表される。それゆえに心理アセスメントや心理療法のなかで用いられることが多く、クライアントの内的世界を理解するためのポピュラーなアイテムの1つと言える。

1) 徳島大学総合科学部

1. Faculty of Integrated Arts and Sciences,
The University of Tokushima

筆者もこの描画法に惹かれた者の1人であるが、大学院時代にみずから「火のある風景描画法」Fire in Landscape Technique (以下、FLTとする)という描画法を考案し、これまでにその臨床的有効性について検討を重ねてきた(石田, 1993:1995:1996a:1996b:1997)。FLT考案の動機は、描かれた「火」の特徴から描き手の特に情緒(感情・情動)的側面をアセスメントするためのヒントが得られるのではないかと考えたところにある。心理臨床場面において、クライアントの情緒状態を把握することは重要であるが、これは決して容易なことではない。真の感情はしばしば抑圧され、クライアント自身にも気づかれなかったり、矛盾した情動が相克するために、外部から把握しがたいことも少なくない。分化し洗練された感情もあれば、未分化で原始的な感情も存在する。また、怒りや悲しみ、不安、抑うつといった陰性の情動は、さまざまな心身の症状として表れたり、不適応行動を引き起こすこともある。

さらに、そもそも言語的交流は「感情交流の土台の上に」(林, 1990) 発達するのであるが、心理療法を進めるためには、セラピストはまずクライアントと感情的なつながりを保つように努力しなければならない。こうしたこともあって、「いかにすればクライアントの情緒状態に対する理解が深まるか?」ということは、当時の臨床経験の乏しい筆者にとって大きな関心事であった。そうしたときに、筆者は情緒状態を言い表す語句や慣用語のなかに、しばしば「火」が登場することに気づいた。

例えば、「熱意」「情熱」「熱中する」「燃える闘魂」「恋焦がれる」「火と燃える愛に身を焦がす」「烈火の怒り」「灼熱の恋」「嫉妬の炎」「燃え尽きる」などは、特に激しい情動を表現するものである。また、情緒に関連するものだけでなく、日常のさまざまな体験を言い表す際にも、「火」が比喩的に用いられることが多い。「火中の栗を拾う」「手を火のなかに置く」「水火を辞さない」「火遊びをする」「風前の灯火」「意気消沈」「燃えるような痛み(炎症)」「火に油を注ぐ」「焚きつける」「火急の問題」などがそれである。ちなみに、英単語の“fire”には「クビにする」の意もある。

たしかに、近代化が進むなかで、燃え盛る「自然の火」を目にする機会は少なくなった。今日われわれの身のまわりにある火は、人の手によって「制御された火」であり、「火の荒々しさに触れ、炎のゆらめく魅力に見入るといった、火との情的な接触の機会」(清水, 1974) はそう多くはない。しかし、上記のような比喩表現が日常的に用いられているのは、今もなおわれわれは心のなかで「火」を体験しているからなのであろう。

リース Riess, G. (1986) の言葉を借りれば、現代人も「自分の中で火のような作用をしたり、私たちがそれを火のように用いたりしている心的なエネルギーとかかかっている」のである【描画1】。

また、すでに多くの描画法があり、改めて情緒的側面をアセスメントするための描画法を考案する必要はなかったのかもしれない。しかし、筆者は、火が古来より人々の生活と密接に結びつき、そのなかでさまざまな象徴的意味が読み込まれてきたことを知るにつれて、「火」の描画(描かれた「火」の内容やサイズ、色彩、動きなど)のなかに、描き手の情緒状態だけではなく、さまざまな内的体験が投射されるのではないかと考えるようになったのである。そして、それは心理アセスメントの際に、他の描画法とは異なる視点からの内的情報を提供するのではないかと考えている。

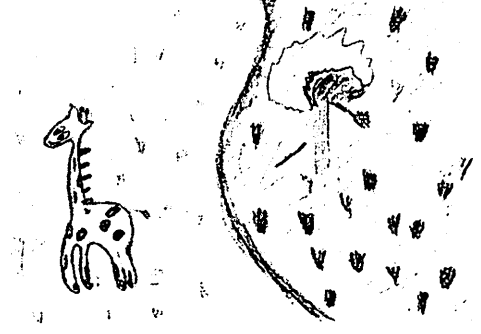
そこで本論では、まず歴史を通じて人々が火と関わるなかで、火に対してどのような象徴的意味を読み込んできたのかを民俗学や文化人類学、宗教および心理学など領域から整

理する。そして、これらの領域にみられる火と心との関連性が、実際にFLTのなかにも表され得るのか、もしそうであるならば、どのようなかたちで表されるのかについて、数枚のFLTを呈示しながら検討してみたい。その上で、FLTを通じてクライアントの内的世界のあり方をよりよく理解していくためのヒントを提示したいと思う。



【描画1】心のなかの火（健常者女性 20歳）

この女性は手のひらの火が「少女のなかに入る。この少女になりたい」と述べた。このように「心のなかの火」がテーマとなるFLTもみられることがある。われわれは心のなかでも「火」と関わっているのである。



【描画2】山火事（健常者女性 19歳）

「山火事」が起り、草原がどんどん燃え広がっていく。動物は火を恐れて逃げまどうしかない。火の使用以前、人類にとっても火は畏怖の対象であったに違いない。しかし、火の獲得によって文明は発展していくのである。

2. 火と人類の関わりの歴史

1) 火の使用と文明の発展のなかで

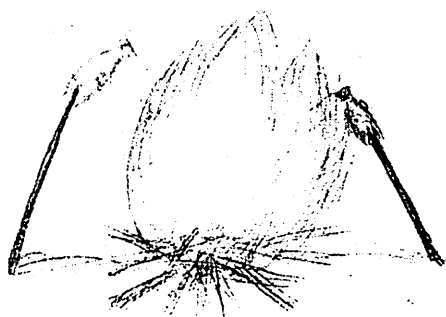
まず、人類が火と出会い、これを使用し、文明を発展させていく歴史を振り返ってみたい。人類が火を使用した最古の証拠は、中国の周口店遺跡に認められている。およそ30～40万年前のことであり、北京原人の化石とともに「焚火跡」が発見されている（石部，1974）。しかし、元来、火は落雷や山火事、あるいは火山の噴火などによって発生したものであり、人の手による制御をはるかに超えた自然現象として恐れられていたに違いない。こうした自然の火をなんらかの方法で獲得し、保存したり、みずから火を起こし、「飼いなす」ことができるようになるまでには、長い苦勞と工夫の歴史があったはずである。それだけに、火を起こす術を知ったとき、「人類はただ火を恐れるだけの動物的存在からの解放をかちとった」（石部，1974）と言えるのである【描画2】。

火の使用によって暗闇を明るくしたり、暖をとって寒さをしのぐことができるようになり、人々の生活に大きな変化が生じてきた。また、食物の調理も可能となったが、これが「道具の製作・使用や言語活動を可能にするための脳の発達を促進させた」（清水，1974）のである。つまり、硬い生の自然食品を加熱によって食べやすくすることで、「咀嚼と消化の働きを柔らげ、それほど頑丈な顎をもたなくても」生存が可能となり、「頭部全体のなかで顎の占める比率が相対的に縮小するのと反比例して、大脳の容量が増加していった」（石部，1974）のである。したがって、後に発達していく「言語活動など高度の象徴的な操作も、火による調理がもたらした」（飯島，1996）とすることができる【描画3】。

このように、火は「人間が人間となるために不可欠の要因」（清水，1974）であり、「自然のままに生きていた人類にいわば文化をもたらし、さまざまな技術の開発や知能の発達

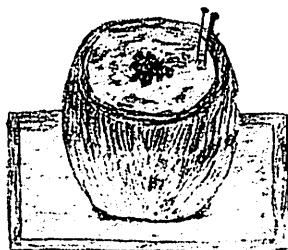
を促し、人を人たらしめた重要な媒体」(飯島, 1996)なのである。吉田・大林(1974)は「人類文化の歴史は火の歴史であると言えようことが出来るほど、火と文化の間は密接」であると述べている。また、松前(1974)も「火の使用は人類にとって原初的なものであり、本質的なもの」であると考えている。

その後、近代化・都市化の発展によって、火の生活文化は大きく変貌してしまった。われわれが日常的に目にする火は、調理用のガスコンロの火やライター火などであり、自然な状態に近い火、例えば「焚き火」でさえみかける機会は少なくなった。しかし、飯島(1996)は「伝統的な火をめぐる生活文化は、多少の変化は徐々にとげつつも、長い間、その基本は維持してきた—(中略)—火のもつ力への恐れや信仰もあって古い姿を保持してきた」と述べている。つまり、大昔から火は人々の生活に深く根ざした存在であったがゆえに、今日でも「さまざまな形で実感」(西口, 1996)されているのである。人類が長い歴史を通じて火と関わるなかで得てきた感覚は、まるで遺伝子に組み込まれているかのように、現代人の心にも潜在しているのであろう。そして、筆者はこの原初的で本質的な内的感覚が、火を描く際にも無意識的に表されるのではないかと考えている。



【描画3】調理の火(健常者女性21歳)

火の使用によって人類の生活は大きく変化した。明るさや暖かさをもたらすだけでなく、食生活にも革命的な変化が生じたが、これは人類の進化も促したのである。原始時代の「調理の火」は、このような感じであろうか。



【描画4】火鉢の火(分裂病男性43歳)

火所は家の中心にあり、常に重要な機能を果たしてきた。「火鉢の火」は採暖のための火であり、この男性は「母がつけた」と想い出を語った。火の暖かさや母親が重なり合ったのであろうか。母親への愛着がうかがわれる。

2) 火と日本人の民衆生活

火と心との関係について検討する前に、日本における火の使用の歴史をみておきたい。まず、古代における発火法として、わが国では「発火錐と火打石」(大林, 1983)が使用されていた。「発火錐」は「火鑽法(ひきりほう)」で用いられるもので、縄文時代より存在していたとされている(石部, 1974)。木の臼(火鑽臼・発火臼)に垂直に立てた木の杵(火鑽杵・発火棒)を錐揉みし、その摩擦熱で火を起こすのであるが、手で杵を回す原始的な「揉鑽法(もみきりほう)」と、弥生時代後期には、火鑽杵に横木(火鑽弓)をつけ、これを上下運動させることで回転力を強化させる「弓鑽法(ゆみきりほう)・舞鑽法(まいぎりほう)」が存在した。後者は平安時代にもみられるわが国の伝統的な発火法であった。一方、「火打石」を用いるものは、「撞撃法(どうげきほう)」というより進んだ発火法であり、燧石(すいせき)と燧石(あるいは鋼鉄片)の角を打ち合わせることによ

って火を起こすものである。5～6世紀頃に朝鮮からわが国に伝来し、中世以降に一般化していったとされている(石部, 1974)。

このように、火を起こす技術が洗練されていくと、人々は火のもつ効能を利用して道具を製作し、産業が発展していった。粘土質の土を焼くことで、容器としての土器が作られるようになったのは縄文時代である(笹本, 1996)。また、青銅器や鉄器の生産は、火の高度な利用法によって達成されたものであり、火で金属を加工することによって刀剣や農具、貨幣あるいは貴金属なども生産されるようになった(石部, 1974)。特に貨幣は物資の流通の基底部にあって、民衆の生活を支えることになる。さらに、後の時代における炭や瓦の生産や製塩においても、火は重要な役割を果たしていたのである。

一方、住居形態の変化にともなって、採暖や調理のための火所にも変遷がみられた。古代から火所は「家や家族生活の中で中心的な位置をしめていた」(飯島, 1996)が、原始的なものとしては「地床炉(地面をそのまま火焼き場としたもの)」がある。また、炉床を意図的に掘りへこめたものを「竪穴炉」と言う。わが国では、竪穴住居が行なわれた全時期を通じて、この地床炉や竪穴炉が一般的であった(石部, 1974)。そして、炉が屋内にとり入れられるようになると、家屋は単なる休息の場から一変して、調理、飲食、道具の製作や集会の場として日常生活のなかで重要な役割を果たす空間となっていく。また、縄文時代後半になると、住居が方形となり、炉は床面中央に置かれるようになったが、それとともに地床炉は「囲炉裏(いろり)」とよばれるにふさわしく整備されるようになる。ここに「埋甕炉」や「石囲炉」が出現してきたのである。しかし、5世紀末頃から、大部分の住居では地床炉などの屋内炉が衰退し、6世紀以降の竪穴住居の中心的な火所は「造りつけ竈(かまど)」が主流となってきたようである(石部, 1974)。竪穴住居がすたれ、平地住居が一般化した後も、土間には竈が置かれるようになった。しかし、後に再び炉が全国的に復活し、炊事も炉(囲炉裏)を中心に行なわれることが多くなったようである(石部, 1974)。さらに、高床式建築が発展し、炊事場と居間が分離すると、炉や竈は暖房の役割を果たさなくなり、次第に火桶や火櫃などが工夫されはじめた【描画4】。

この他にも、後の時代における「風呂」や「香」あるいは「花火」なども、火がもたらした文化である。

以上、わが国でも火がいかに民衆の生活と密着したものであったかが分かる。笹本(1996)は「火が歴史を通じて、日本人の生活に深くかかわっていたことは言うまでもない」ことであり、「熱を出し、物質の性質を変え、明かりとなる火を、人間はさまざまに利用して歴史を作ってきた」と述べている。しかし、火を起こすことが容易でなかった時代の人々にとって、火を維持することの苦労は相当なものであったに違いない。

3) 火を維持するための苦労

民俗学者柳田國男(1944)は、『火の昔』において「殊に火については昔の人は苦勞した」と述べている(「勞」という文字の「かんむり」が、「火」であることにも注目)。今日とは異なり、昔の人々は「一旦作った火を大事に守つて、育て又はながらへしめることに、大きな力を傾けた」のである。それゆえに、「最初火を造る方法が甚だ六つかしかつた時代から、是は容易に消してしまつてはならぬものといふ考へが、深く心の中にしみ込んで残つて居る」と言う。つまり、火を維持するための苦労を重ねるなかで、火は精神的

なレベルでも非常に大切な存在となっていたのである。清水（1974）も、こうした大切な火であるからこそ、「常用の火を絶やさない努力の背後には、技術的事情以上の象徴的な意味がある」と述べている。また、日本以外の多くの民族でも、燃え続ける火は生活の安寧な継続の裏づけとして必要なものであり、「火は生活と不可分であり、その支えであり、その象徴」（清水、1974）となっていたのである。

このように、火は原始時代から生活のあらゆる面に関与し、文明を発展させた実用的な存在であるだけでなく、人類の精神面に与えた影響も多大であったことから、そのあつかいには細心の注意がはらわれ、ついには神性化された存在にまでなっていたのであろう。日本民俗学における火の研究でも、火の神聖性、火の清浄性、火の神の多様性、火の呪術性などに問題をしばって論じられることが多い（坪井、1974）。

4) 火のもつ象徴的意味

ノースロップ・フライは、バシュラール Bachelard, G. (1938) の『火の精神分析』の序文（英訳・1964年版）において、「火はすでに数多くの他の経験の諸相と連結している。その熱は温血動物としての人間が感じる内部の熱と類似し、その火花は生命の単位としての種子と、その明滅する運動は生命力と、その焰は男根の象徴と類似し、さらに－（中略）－性的行為を連想させ、その変形力は浄化作用と類似している」と述べている。これは火が象徴するものをまとめて言い表したものであり、火が「物としての効用からは測りがたい、多様な象徴的意味を担っている」（清水、1974）ことを示している。それでは、火の象徴的意味にはいかなるものがあるのだろうか。

火のもつ象徴的な意味は、火がもつさまざまな機能と密接に結びついているが、その1つに「媒介者」としての機能がある。飯島（1996）によると、火は「人生や季節の節目には古い秩序を象徴するものとして積極的に消され、新たな火が鑽りなおされた」らしく、「消火と再点火の儀礼を通して穢れを払い、古い時間や秩序の更新をはかろうとした儀礼」は日本各地にみられたようである。正月に「古い火を消して、新しい火で春を迎える」（柳田、1944）風習もその一例であり、人々は昔から火を媒介として時間を更新しようとしてきたのである。

また、飯島（1996）は、火は「物質としてのレベルから象徴的なレベルに至るまで一貫して、他の要素に働きかけて意味あるものに変換するという媒介作用を基本的に有しており－（中略）－腐食し衰退した日常性に新たな生命力を付与して甦らせるのも、この火の媒介作用による」と述べている。

この他にも、清水（1974）は「食事をめぐる火は社会的結合と排他性とを表わす恰好の象徴となりうる」と述べている。また、坪井（1974）は「火の別の象徴である赤色の観念は、白色が清浄観を象徴するところから、赤色を汚穢とする観念を生み出す基盤となったり、火の靈力、呪力を背景としたところの放火行為が、邪悪感、罪過感を生み出した」と述べている。

以上のように、火のもつ象徴的意味は多様であるが、その多くは火の実用的な機能と関連するだけでなく、宗教的な要素もたぶん含んでいることが分かる。そこで、まず神話や宗教における火の象徴的意味についてみていきたい。

3. 神話、宗教および昔話における火

1) 神話や宗教における火の意味

火が人々の精神にも多大な影響をもたらしたことをうかがわせるものとして、火にまつわる数多くの神話がある。ここでは、世界各地に存在する火の神話についてみたい。

まず、火の誕生に関する神話として、わが国では「カグツチ」という火の神が、女神イザナミから生まれたことが『古事記』に記されている。火が神から生まれたという神話は世界中に分布しており、特にポリネシア、メラネシア、南アメリカに多くみられる。なかでも「火が女性の陰部にあった」(吉田・大林, 1974)とするものは興味深い。

また、火を「神」とみなす神話は、日本以外にも数多くみられる。例えば、ヒンズー教の神「アグニ」は、古代アリアの火神であり、さまざまに変身し、地上では火、空中では稲妻、天空では太陽であるという。また、モンゴルにおける火の祈禱文には、「オト」という名の火神があらわれるが、「オト」は一般的な火ではなく、「一家の統合と家系継承の象徴としての『かまどの火』をさす」ものであった(田中, 1974)。ローマの「ウェスタ」やギリシャの「ヘスティアー」なども「炉」の女神であり、炉に燃える火が崇拜の対象とされていたようである。これらの神は、インドの「アグニ」やギリシャの「ヘーパイストス」、ローマの「ウォルカーヌス」などのように、自然の火をも含めた火一般を象徴するのではなく、家庭の炉に燃える「飼いならされた」秩序的な火を象徴するものであった(清水, 1974)。古代ギリシャやローマの家には、炉(=祭壇)が必ずあり、炉火は家の守護神として祭られていたが、「祭壇の火が消えることは、災いや一家の死滅を意味した」のである(清水, 1974)。こうした「炉火の神」の信仰は、世界各地にみられ、日本でも近年までは、民家の台所に「竈神の荒神さま」がまつられていた。

その他、北アジアの信仰では、火事は「火が怒り狂った結果」(清水, 1974)であると考えられている。西口(1996)も「火災は、自然災害と人的災害とを問わず、神仏の怒りである」と述べている。

一方、火が「神のもの」であったとする神話も存在する。なかでも、ギリシャの『プロメテウス神話』は有名である。巨人神プロメテウスは、神々の父ゼウスの命令によって人間を作った。しかし、彼は人間を愛するあまりに、ゼウスによって禁止されていた火を太陽から盗み、人間に与えてしまったのである。その結果、ゼウスの怒りを持ったプロメテウスは、処罰として山の岩壁に縛りつけられ、その肝臓を秃鷹についばみ続けられることになる。こうした神話を受けて、熊倉(1996)は「火は神のものであった。東西の神話にあるように人間が神から火を与えられた(盗んだ)時、人類は全く新しい文明を切り開くことができた」と述べている。先の「カグツチ」の「誕生の直前直後に文化の神がまとまって生まれて」いることから、吉田・大林(1974)は「火が自然から文化への移行の媒介者である」ことを強調している。

また、火は神聖な存在であるがゆえに、火に関する儀礼も多く存在する。例えば、ペルシアのゾロアスター教では、火が信仰の大きな位置を占めていた(田中, 1974)。しかし、西口(1996)は、火そのものへの信仰は必ずしも多くなく、むしろ『燃やす』・『焼く』行為が、神仏にかかわって重要な宗教的役割を負っていた」と考えている。そして、この宗教的役割とは、『伝達ないし信号』と『浄化』としての役割であると言う。

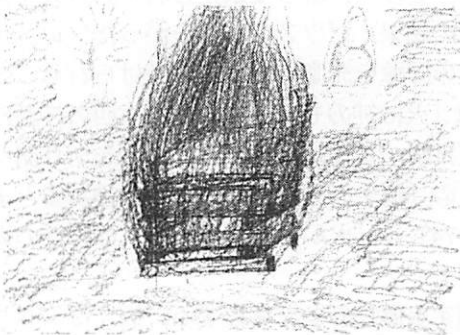
まず、火の『伝達ないし信号』としての役割であるが、千々和(1983)は、中世の人々

は「焼くという行為によってこそ、自分たちの意志が別の世界（他界・神・仏・天といったもの）に届く」と考えていたと述べている。つまり、火が燃え、煙が立ちのぼることは、神仏への意志の伝達ないし信号の手段となるのである。

一方、『浄化』としての宗教的役割としては、日本でも火は「神仏へのもてなしの一つとして灯明の形で古くからささげられてきた」ことから、「神仏の灯明は浄火である」（飯島，1996）必要があった。そして、神聖な存在であるがゆえに、穢（けがれ）を焼き浄める機能をもつとされていた。つまり、「焼くことによって穢は浄化され、清浄な状態に復帰することができる」（西口，1996）のである。また、「地獄絵」に登場する業火も、悪人を罰し、苦しめる火であると同時に、すべての罪障を焼きつくす「キヨメ」（熊倉，1996）の火である。さらに、タイマツの火の粉が「ケガレをふり払う霊力」（熊倉，1996）をもっていたり、「多勢の手で大きな火を焚くことが、一つのまじないの力にもなる」（柳田，1944）と考えられていた【描画5】。

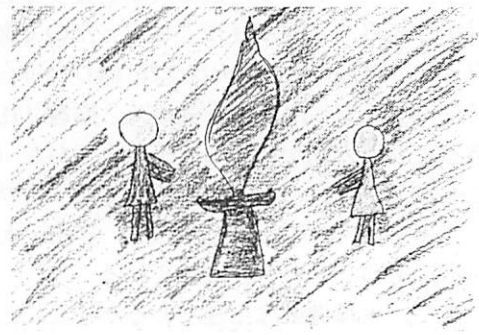
また、日本列島において火の神の信仰が盛んであるのは琉球列島であるが、火は「家の神」であり、その機能としては第一に火事を起こさないこと、第二は一般的な守護活動、そして、第三の機能の基礎には、火が一般的にもっている媒介者の機能があげられている（大林，1983）。この第三の媒介機能として、火は「神々と人間との仲介者であり、人の生活の場を『世界』につなぎとめる支柱」と表象されていた（清水，1974）。さらに、古代の中国や日本では、火が占いに用いられたり（石部，1974）、縄文時代や弥生時代には、葬送においても火が用いられていた（死者のために焚く火を「燔火」と言う）が、ここでも火は人々と神仏の間を仲介する役割を果たしている。つまり、火は「神」であるだけでなく、「神への通路」あるいは「神意の表現」（熊谷，1996）でもあったのである。

このように、火は古代から宗教との関連が強く、神聖なものともみなされてきたがゆえに、「一たびおこした火は消してはならぬもの」（石部，1974）なのであった。「火継」も発火させた神火を大切に管理し、後世に伝えていくための聖火継承の神事であり、火神性を未来に伝承しようとするものである（林屋，1996）。そして、「燃えつきることのない火とは、人間によって神的なものとして経験」（リース，1986）されてきたのである。



【描画5】護摩焚きの火（健常者男性 25 歳）

「護摩焚き」とは、不動尊の前で火を焚き、悪業を焼き滅ぼす真言宗の秘法である。火は古代から神聖なものであり、穢を焼き浄め、清浄な状態に回復させる力をもつ。ここには火による「死と再生」の観念がうかがわれる。



【描画6】祭礼の火（神経症女性 57 歳）

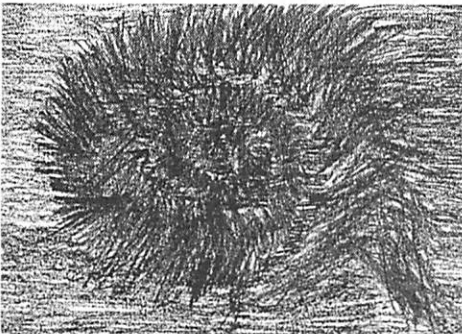
祭礼の火として燃えているのは「聖火」であり、この女性性は「お祈りをしている。願いが叶うように燃えている」と言う。火にまつわる儀礼には、人類に普遍的な思考が反映されている。火を焚き、神仏に願いを託すのである。

以上、火にまつわる神話的表現や信仰・儀礼のなかに、われわれは「人類文化に共通する一つのアルカイックな思考の構造を析出できる」(吉田・大林, 1974)のである。日常的には、火に「神性」を感じる機会は少なくなったが、「非日常的には、諸種の宗教行事、通過儀礼などにおいて、火は神を迎え、祭祀し、そして送るための重要な役割を持ち、火の聖性を象徴する様々な儀礼が展開されている」(坪井, 1974)のである【描画6】。

2) 昔話や伝説における火

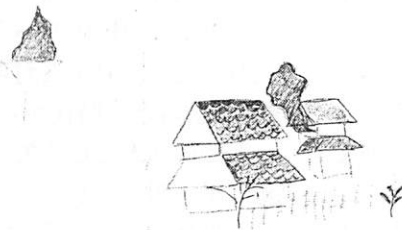
また、われわれは昔話やおとぎ話、あるいは伝説のなかにしばしば登場する「火」を通して、火の象徴的意味や火の超自然性を感じとることもできる。例えば、グリム童話の『トルーデさん』のなかでは、登場する女の子は最後に「棒切れ」に変えられ、火に投げこまれて死んでしまうが、河合(1977)はこの火を「グレートマザー」と結びつけた火であり、「重く、暗く、大地と結びつけた炎」と述べている。また、ユング夫人はこうした火を「大地の精の火」とよんでいたようである。同じく『ヘンゼルとグレーテル』のなかでも、魔女は最後に焼き殺されるが、これは火によって「肯定的な面へと変容され」たことを意味しており、火による「生命の変容」という機能が強調されている。

また、世界中の伝説のなかには、「火の怪物」が登場するものもある。火蜥蜴(サラマンドラ)やエウロ(オーストラリアの神話に出てくる動物で、体中に原初の火を含んでいる)などがそうである。不死鳥(火の鳥・フェニックス)も炎のなかで焼け死ぬたびに新しく若返って甦る。エジプトでは「火は誕生と成長とを経験するあらゆるものをむさぼり食う、魂を奪われた、貪婪な動物」とであると考えられていた【描画7】。このように、現代でもわれわれは昔話や伝説を通して火の象徴的意味や超自然性を体験しているのであり、これは古代の人々が体験していた感覚とそれほど大きな違いはないものと思われる。



【描画7】火の龍(健常者男性24歳)

時代を超えて、火が超自然的な存在としてイメージされることも多い。神仏ばかりでなく、怪物の姿をとる場合も少なくない。この男性がイメージした「渦巻く火の龍」は、生命力だけでなく、破壊力をも象徴していた。



【描画8】聖火と火事(神経症女性25歳)

用紙が2分割され、左右に「聖火」と「火事」が描かれた。この女性は家庭生活に不安と不満を抱いていたが、「自分でもがんばってみよう」という思いも生じてきた。不安と期待の葛藤が「火の二面性」を通じて表された。

4. 火の二面性

すでに、われわれは火がもつさまざまな機能や象徴的意味についてみてきたが、ここで火が「二面的」な性格をもつことに気づく。つまり、火はコントロールできている限り、

人々の生活に貢献するが、いったんコントロールを失うと恐ろしい破壊力を発揮し、われわれの生命をも脅かすのである。河合（1977）は、火が「人間の文明にとって不可欠なものとして、建設的な意味をもつ反面、すべてのものを焼きつくす破壊性」を有すると述べている。火には「創造と破壊、精神と物質、光明と燃焼、文化と自然などといった二つの相反する性質が同居して」おり、「人は、火との長い交渉の歴史のなかで、火のもつこうした性質やその形状を使い分けながら、火の生活文化を育ててきた」のである（飯島、1996）。吉田・大林（1974）も、火の二面性が「人間の文化そのものの二面性と関係している」と述べている【描画8】。

しかし、「火の二面性」は単に対立するだけのものではない。なぜなら、火による「破壊」や「死」は、新たな「生命」や「再生」へとつながる可能性もあるからである。坪井（1974）は「火に対する恐怖の側面としての燃焼による焼去が、次の過程では再生、豊熟といった生産機能」を果たすことを述べている。そこで、以下に「火の二面性」について詳しくみてみたい。

1) 火がもたらす恩恵および火と生・性との関連

a) 火と明かり

まず、火がもたらす「明るさ」について試みる。火の使用以前、日没後は月や星の明るさしかなかった。それゆえ夜の活動は困難であり、野性動物から身を守るためにも人々は活動をやめ、眠りについたのであろう。また、暗闇は野生動物以上に不安や恐怖をもたらしたに違いない。しかし、火の使用によって人々の生活には革命的な変化が生じた。笹本（1996）は「文化の進展とは夜における人間の活動時間の拡大と、闇の恐怖をどのようにして取り除くかでもあった。その克服の最も原初的な形こそ火であった」と述べている。

暗闇を照らす火の代表として「蠟燭の火」がある。蠟燭の起源は古く、古代エジプト、ギリシア、ローマに知られ、中国でも紀元前3世紀頃の蠟燭台が発見されている【描画9】。日本では、平安時代になって初めて灯明用の素焼の皿が登場したようである。また、「篝（かがり）」を焚く風習は奈良時代からあったと推測されている。ちなみに、篝は「鶺鴒の必需品であり、漁師の漁火として欠かせない生産の火」（石部、1974）でもあった。

しかし、火の光は単に明るさをもたらすだけのものではなかった。石部（1974）は「原始・古代の人々は、野獣だけでなく、さまざまな超自然物の存在を信じ、その除魔のためにも火を頼りにした。夜を明るくする工夫は現代人以上に切実なものがあつたに違いない」と述べている。飯島（1996）も「火のまわりに人がよく集まるのは、その暖かさもあるが、夜の闇に輝くその明るさが人々に希望と勇気を与え、身体とともに心を暖めて、邪悪なものを払い退けてくれたからであろう」と言う。現代においても人々は暗闇を嫌い、明るさを求めるが、これは古代人が抱いていた感覚と本質的に同じものと思われる。

なお、笹本（1996）によると、わが国の古代・中世において夜の明かりをもっとも必要としていたのは寺社や貴族であり、特に油の最大の消費者は寺社であったようである。こうしたことから、夜の明るい場所は「権威や権力の象徴」となり、寺社に灯される光は「民衆にとっても宗教的意味」をもつようになったという。

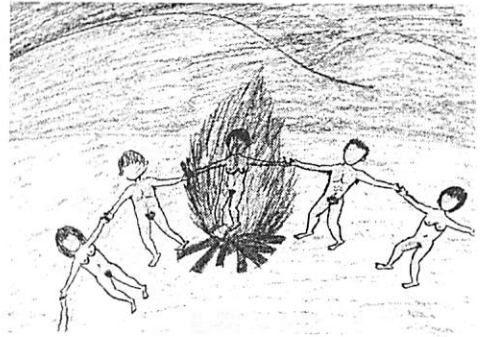
この他にも、火がもたらす光には、信号や道しるべとして、暗闇のなかの目印、あるいは道案内としての機能もある。柳田（1944）によると、外のあかりの根源は松明であった

が、この火は盆に帰ってくる先祖たちの「道案内のあかり」でもあったらしい。



【描画9】 蠟燭の火 (分裂病男性 15 歳)

最初に描いた「人魂」が怖くて、停電時に母親がつけた「真っ暗なところで燃える火」に描き直した。暗闇 (発病) の恐怖から光 (母親) が守ってくれるイメージか。



【描画10】 団樂の火 (健常者男性 24 歳)

人々が火を囲んで歓談する「団樂の火」は、健常者に多い (石田, 1996 b)。これは原始時代の「団樂の火」のイメージであるが、夫婦が裸で火の周囲をまわる風習は日本にもあり、火と性の関連性も表されたFLTである。

b) 火と団樂

火の明るさだけでなく、その「暖かさ」からも、人々は自然に火の周囲に集まるようになった。その結果、火が人々の結びつきをよりいっそう強めたであろうことは容易に想像がつく。飯島 (1996) は、火は「野獣や悪霊などさまざまな危険から守ってくれただけでなく、照明、採暖、乾燥、調理などの諸機能を果たし、火所は家族の結束を固める団樂の場ともなった」と述べている。また、リース (1986) は「光の源や暖かさの源としての火はまた、共同体を作り出します」と述べ、バシュラール (1938) も「火は家族団樂の中心となる」と述べている。以下に、「団樂の火」に関するいくつかの資料をみてみたい。

アンダマン諸島の採集狩猟民の村では、各家屋にある家族用の火のほかに、共同の火が断えず燃やされている。人々は家族の火や共同の火のまわりに会して歓談するのであるが、清水 (1974) は、この事例のなかに人類の家族的な生活一般と火との関連の原型的なかたちを見出すことができると述べている【描画10】。また、他の多くの民族においても、火は生活の中心に位置づけられ、家族生活が火 (炉) を中心に編成されてきた (清水, 1974)。最近では、みかけることも少なくなったわが国の「囲炉裏 (いろり)」の火も、「かつては大切なもてなしの一つ」 (熊倉, 1996) とされていた。しかも、「囲炉裏」という言葉には、火を中心に家族が普段から「居る場所」という意味があり、かつては火所を中心に一族の生活秩序が形成されていたのではないかと考えられている。つまり、火は「見えない力で家族を秩序づけ結束させる働き」 (飯島, 1996) を有していたのである【描画11】。

このように、火は単に食物を加工し、暖をもたらすだけでなく、「人々の暖かい結合をもたらす」 (清水, 1974) ことから、「団樂の火」にもなるのである。火は「ともに自然へと立ち向かう仲間の結合を、文字通り、『暖める』」 (清水, 1974) のである。柳田 (1944) も「竝んで居て御互ひの顔が、残らず見られるのは都合のよいことで、其顔が赤々と焚火

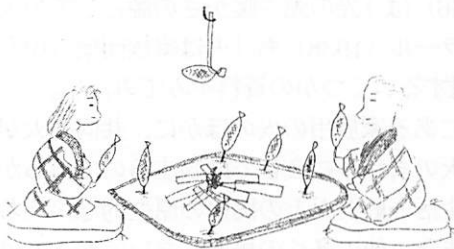
に映るのですから、是でこそ一家團欒といふ言葉が、割引き無しに通用します」「人が近くに顔を見合はしつゝ、續けて物を言ふやうになつた始まりは焚火の傍かも知れません」と述べている。「あたかい人間関係」といった言いまわしも、火がもたらす暖かさや重ね合わせたところからきたものではないかと思われる。

また、火による調理も家族や共同体の絆をより強める役割を果たしてきた。飯島(1996)は「家族は同じ火で調理された食物を通して、生活をともにする人々の絆を強めた」と述べている。坪井(1974)も日本人が「火の共同、つまり食事の共同」をもって人間関係の結合を深めたことを指摘している。さらに、宗教儀礼における火も共同体の結合を強めたと考えられる。清水(1974)は「聖火(そして祝火)は共同体の内的結合を象徴している」と述べている。

c) 火と生・性との関連

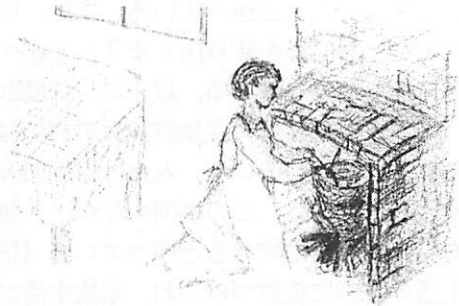
火は家族や共同体の結合を可能したが、さらに根源的なもの、すなわち人類の「生」や「性」とも深く結びついており、これらを象徴するものでもあった。清水(1974)は、火は「生命力であり生殖力・多産力である」と述べている。飯島(1996)も火は「それ自体が生命の象徴」であると言う。こうした観念を示すものは世界各地にみられる。

例えば、アトニ、ホットントット、アイヌの諸民族のように、分娩を燃える火のそばで行なう民族は少なくない。「炉辺では、生(生活・生命)の再生産という、人の存在の最基底層が果たされる」(清水, 1974)のである。古代ギリシャやローマでも、子どもが生まれて10日前後に、女性が赤児を抱いて炉火の周囲を駆けめぐり儀礼を行なわれていた。これによって子どもは浄められ、火の生气・活力を注入されると考えられるのである。このように、火は生殖やそれによって生み出された生命を象徴するだけでなく、生命を与える力、生殖をもたらす性的な活力でもあった(清水, 1974)。



【描画11】 囲炉裏の火 (分裂病女性 35歳)

囲炉裏は古代から家の中心にあり、家族の結束と秩序を維持してきた。このFLTには「夫と一緒にゆっくりすごしたい」願望が表された。発病を繰り返す妻に理解を示す夫と、発病しても夫や子どもを気づかう妻であった。



【描画12】 暖炉の火 (健常者女性 21歳)

特に女性に多くみられるのが「暖炉の火」である。「炉」の形は「イテソ人の女の火」と類似性を持ち、「子宮」を象徴するのかもしれない。FLTの「暖炉の火」も描き手の「女性性」と関連している可能性がある。

また、火の起源もしばしば性行為や性器と関係づけられる(吉田・大林, 1974)。最初の火が女性の陰部から生まれたという神話が世界各地でみられることはすでに述べたが、

ニューギニア・アニム族の火の起源神話では、最初の男女が性交を行ない、その摩擦から火が生まれたとされている(松前, 1974)。原始的な発火法(火鑽法など)と性行為にも、摩擦という点でアナロジックな関係がある(吉田・大林, 1974)が、性行為が「燃えるような行為」であることから、火と性との結びつきがイメージされやすいのである。

さらに、生命を産み出すという意味で、火が女性と関係づけられることもある。坪井(1974)は、「大地は女性そのものであり、火は女性の生産意欲の表現であった。大地に火が宿ると表現してよい」と述べている。また、「アフリカのイテソ人の女性儀礼では、各々男性女性を表わす二つの火が焚かれ、男の火は地面に薪を積んだ裸の火であるのに対して、女の火は石を四つ置いて作られた炉に燃やされる」(清水, 1974)という。結婚による新たな生活を、新たな火で表わす事例も少なくない。プリヤート人や北アジアのアルタイ系民族では、新婦が炉火を押し脂肪をくべ、これによって炎が勢いよく燃え上がることは、家族の増大、つまり多産を予兆すると考えられていた。「火は女性に生殖力をもたらしもする」(清水, 1974)のである【描画12】。

これ以外にも、火と性・性欲との関連について述べているものは数多く存在する。ヘシオドスは「女性は男を燃やす火である」と言う。また、リース(1986)も「愛の火」と性や性欲との関連を指摘している。バシュラール(1938)も「性的衝動に対するどんなあらがいがあっても火に対するあらがいがいによって象徴されるにちがいない」と述べている。

以上、火は原始時代から照明や採暖、調理など生活を支える基盤であったと同時に、性や生命とも密接に関連していたことから、火を絶やさず保存することは人々の生命の安全を維持することをも意味していた。火はまさに「生命の象徴」(松前, 1974)なのである。

2) 火による破壊と再生

次に、火のもつ破壊的な側面に目を向けてみたい。これまでみてきたように、火は文明の発展に欠かすことのできない存在であったが、そのあつかいを誤ると恐ろしい災禍をまねくことになる。現代でも火事などの災害によって家屋は破壊され、生命が失われることもある。山火事や火山の噴火は、人の手による制御をはるかに越えている。われわれが火の力に対して不安や恐れを抱くのは、火が完全にはコントロールできないからである。それでは、「火の破壊性」は人類の精神にどのような影響を与えてきたのであろうか。

リーキーLeaky, L.S.B. (1972)は、先史時代後半の人類の攻撃性をたどり、「3～4万年前、人間は、火、言語、抽象概念、宗教、魔術を発見して以来、暴力をふるうようになった」と述べている。種田(1979)も「ドルドーニュ洞窟にいた新人は、火を使用した跡や攻撃的道具、壁画を残した最初的人类であるが—(中略)—自分で火を作ることを知った人間は共同生活を開始し、コミュニケーションのことばが生まれ、そこから敵意が、信仰が、魔術が、そして死が発見された」と述べている。つまり、火は文明の発展だけではなく、暴力や敵意など人類の攻撃性の起源でもあったと考えられるのである。

しかし、火の破壊性にも肯定的な側面がないわけではない。なぜなら、火は穢れを浄化し、新たなものを再生する力も有するからである。バシュラール(1938)も「火はいっさいを浄化する」と述べている。火の浄化機能についてはすでに述べたが、火による浄めの意味が込められた習俗としてヨーロッパの『浄火』がある。清水(1974)によると、これは「前世紀に至るまで中欧・東欧の農民の間で根強く実行されて」おり、この習俗は「生

活上の困窮の除去という、農民の願望によく応えるもの」であつたらしい。

また、清水（1974）は「未開人や農民にとって、火が破壊力を発揮し、それに彼らが依頼するのは、日常的にも儀礼的にもまずは悪霊や穢れの類に対する霊的な力としてであつた」と述べている。つまり、火のもつ破壊力は人々を脅かす一方で、「悪霊や厄災を追い祓ったり、罪や穢れにまみれた人が、穢れを浄めたりする力をもつ」のであり、火渡りなどの浄めの儀礼では、むしろ「火が破壊力として活用されていた」のである。「火葬」も死という穢れを「火によって焼き清める」意味があり、焼き清められた穢れは「聖なるものへと転換する」というメカニズムがあると信じられていた。死後の世界である「煉獄」の業火によっても、魂は精錬され、贖罪や変容が引き起こされるのである。

以上、火は性や生命を象徴するだけではなく、すべてを焼き尽くす破壊力や攻撃性をも象徴するのであるが、火による破壊はすべてを無に帰すだけでなく、その浄化機能は新たな再生や変容を引き起こすのである。したがって、FLTに表れた「破壊的な火」の意味を理解する上でも、こうした肯定的な側面を見落とさないように注意しなければならない。

なお、FLTにおける「破壊的な火」の意味については、これまでも事例をあげながら検討している（石田、1995）。

5. 心理学・哲学における火の意味

これまでは、主に民俗学や文化人類学、宗教などの領域にみられる火の象徴的意味や火と心との関連について整理してきた。次は、心理臨床場面に直接関係する領域である心理学や哲学における火と心との関連に目を向けてみたい。

1) 心理学における火

心理学、特にフロイト Freud, S.が創始した精神分析学のなかでは、「人間にそなわっている基本的な欲動として、性的な欲動と攻撃的な欲動」（岩崎、1979）があり、これらは常にさまざまな度合いに融合してはたらくと仮定されている。そして、性欲動と攻撃欲動の葛藤が意識的に体験されるときに情動が生じるのである（二元論的本能論）。また、これらの欲動は、いずれも精神病理的な諸現象の発生と密接に関係すると考えられている。一方、分析心理学のユング Jung, C. G.は、情動が集合無意識の領域にある「元型」の意識的随伴物であると考えていた。

この情動について、サリヴァン Sullivan, H. S.は、「基本的情動性」という言葉を用いている。鑑（1977）は、これには「対人関係的に親和的な方向、つまり、人に近づこうとする方向、あるいは人に親しもうとする方向と、反対に人を突き放し、遠ざけようとする方向とがある」と述べている。前者は「信頼感、依存性、親密感、安全感」などであり、精神分析学における「性的な欲動」と関連している。一方、後者は「怒り、恐れ、不安、嫉妬、うらやましがり」などであり、「攻撃的な欲動」と関係していると考えられる。

火が情動を表す語句に多くみられたり、性や攻撃性との関連が深いことはすでに述べてきたが、同様のことは心理学の領域でも言えるであろうか。そこでまず、精神分析学における火と情動および欲動との関連についてみる。

フロイト（1932）は『火の支配について』において、「原始民族にとって火はなにか愛の情熱に類似した物として、われわれの言葉でいえば、リビドーの象徴としてたち現れた

にちがいない。－(中略)－火が発散する暖かさは性的興奮状態で起こるものと同じ感覚を呼び起こすし、炎の形や運動は活動中のペニスを連想させる」と述べている。また、症例『ドラ』(1905)の〈火の夢〉における「火」が、大人(父親やK氏)によってかきたてられた情熱であると同時に、その火に焼き殺されるかもしれない不安を意味するものであると解釈している。鍾(1988)もドラの〈火の夢〉について「思春期の性の目覚めに対する、成人の関与が明瞭に示されている」と、火と性の関連を指摘している。つまり、精神分析学において火は「リビドーの象徴」であり、民俗学や文化人類学と同様、性(生)や性行為を象徴し、ひいては家族のつながりや共同体の結合をも象徴すると考えられる。

また、前田(1994)が図示した「フロイト時代の精神装置」や「現代の精神装置」のなかで、本能が「炎」に例えられていたり、イド領域に「生の炎」や「死の炎」が描かれていることも興味深い。わが国の精神分析学者である前田も、「火」は性欲動や攻撃欲動を象徴するものとしてとらえているのである。したがって、精神分析学では、2つの本能的欲動は「火」に例えることができ、心理臨床場面(夢や箱庭およびFLTなどの描画法)に表れる「火」も、これらの欲動やこれと関連する情動のあり方を表している可能性があるのである。

2) 夢における火の意味

ユング派の心理学者リース(1986)は、夢のなかに表れる「火」の意味について詳しく述べている。リースによると、心理学的な意味での「火」は「炎をあげて燃え立つ生のエネルギーであり、愛や憎しみのようなさまざまな感情や激情が赤々と燃える熱の比喩」であると同時に、「変化を引き起こしたり破壊したりする感情や激情がもっている力の比喩」であると言う。これは火が激しい情動や生のエネルギーおよび破壊のエネルギー(火の二面性)と深く関連していることを示唆している。

また、火は「心のさまざまな対立傾向の緊張から生じるものであり、一つの根源的な全体を個々の部分へ崩壊させる」が、他方で「対立したり分離されたりしたものがこの火の中で再び一つの新たな全体へと融合しうるほど強烈な熱を生み出すこともできる」と考えている。これは火による「死と再生」について言及したものである。

さらに、古代から野生動物や悪霊を追い払ってくれた火が「心理学的には、深く根を下ろした根源的な信頼と比較すること」ができると言う。「無意識という暗闇を照らし、燃えるように激しい紛争に対する可能な解決を認識させる灯火標識として、火の夢は道しるべとなって、私たちにはまだ隠されている目標を指し示すことができる」のである。

火と性の関連についても、「エロスの火の発達によって無意識のより深い層が活発になり、さまざまな限界が踏み越えられて、新たなさまざまな次元が開かれる」と述べている。

一方、夢に表れる火の攻撃的・破壊的側面については、「方向の定まらないエネルギーがもっている固有のダイナミズムは、夢の中では火の手が上がることや爆発、あるいは似たような破壊の象徴によって表現されることがあります」「夢の中で自動車や家や木が燃えているとすれば、魂のエネルギーが破壊的になったのかもしれない」「夢の中での火山の噴火は、せき止められていた激情の爆発がさし迫っていることを暗示している可能性がある」などと述べている。つまり、夢のなかで火が破壊的な様相を示すときは、内面で強い攻撃衝動が高まっていたり、心が崩壊の危機にさらされている可能性があるのである。

例えば、河野（1977）は『生と死の心理』のなかで、末期癌に侵されている男性の「火事の夢」（「火事だ、火事だ、燃えている」）を紹介している。この男性はこの夢をみた数日後に他界している。筆者もこれと類似したエピソードを聴いたことがある。やはり死が迫りつつある年老いた父親が、「火事だ！」と言って動揺したという。また、夜間の精神科病棟で、不穏状態になった分裂病者が防火扉を閉め、ドアの前にダンボール箱を積み上げてバリケードを作っていたが、筆者が理由を尋ねると「火事になるから」と答えた。これらのエピソードは、「火事」が精神状態の悪化や生命の危機に際して表れてくるイメージであることを示唆している。バシュラール（1938）も「精神病理学はアルコールによる錯乱症状の中に火の夢の頻発を認めた」と述べている。

そして、リースは「火加減があまりにも強くなりすぎる場合には、生命がまたそこで焼きつくされ破壊されてしまう可能性」があると考えており、破壊的な火に人格が圧倒されないためには、「火の強烈さに耐えることのできる耐火性の容器－適度な自我の強さ－が必要であると言う。つまり、「確固としていない自我構造やあまりにも弱い自我境界しかない場合には容器が破裂して、火が噴火している火山の溶岩流のように人格からあふれ出て燃えつきてしまっ、ついには死火山になってしまう危険」があるのである。

ただし、火の夢は「それを理解すれば、自分の中で何か燃えているか、どこでそれが燃えているかについて示唆を与えてくれる可能性」もあり、心のなかで燃えている火の「正しいとり扱いのための助言者になる」と述べている。「火ととり組み、出火原因やその背後にある意味とを認識することによって、火が危険でなくなる」場合もあるのである。したがって、夢のなかの「破壊的な火」の意味に気づくことで、精神状態の悪化を未然に防ぐこともできるのである。

もちろん、火の夢の解釈を単純に描画の解釈にあてはめることはできないが、リースのこうした洞察は、FLTを理解していく上でも示唆に富むものである【描画2・8・13】。

3) 哲学における火の意味

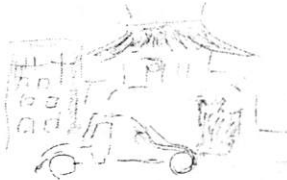
哲学の領域でも、火と心の関連について興味深い考察がなされている。バシュラール（1938）は『火の精神分析』において、火は「すべてを説明することのできる特権的現象」であり、それは「われわれの心のうちに生きる」と述べている。「火こそ人間精神が『反映した』まさに最初の対象であり、『最初の現象』であると考え、火が古くから人々の心と密接なつながりを有してきたことを強調している。

心理学と同様に「原初的な火の性的な性格」についても言及している。性行為における身体の擦り合わせによって熱、すなわち火が生じるのであって、「愛から火を創りだす」と言う。また、火は「あらゆるものがその存在を負っている元素」であり、「温め返し、活力を回復させる」と、火と「生（生命力）」との関連についても述べている。

さらに、火は「己れ自身と矛盾することが可能」であるがゆえに、「普遍的な説明原理のひとつ」となるのであって、「すべての諸現象のうちで、それは実に相異なる二つの価値づけ、すなわち善と悪とを同時に断固として受け入れることのできる唯ひとつのものである」と、火の二面性についてもふれている。

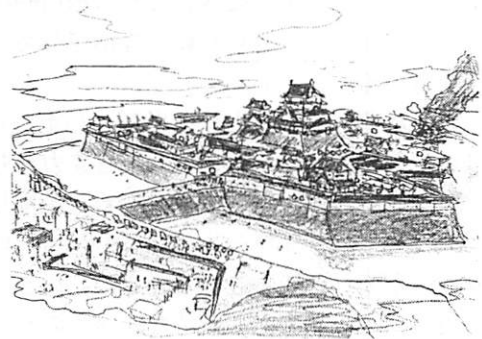
特にユニークな考察としては、火が「社会的禁止」であるとするものである。彼は「もし子供が火に手を近づけると、父はその指に対して戒めの一打をくれる。－（中略）－火

はそれゆえまずはじめに『一般的禁止』の対象なのである。－(中略)－社会的禁止こそそもそも火に対するわれわれの最初の『一般的禁止』なのである」と述べている。たしかに、火が社会的な禁止の対象であることは、「火遊びをするとおねしょをするぞ」などと言って、子どもに「火遊びを禁止」するなかにもみることができる。このように、火を社会性や超自我と関連づける点で、バシュラールの洞察は卓越したものであるが、FLTに表される火からも、描き手の規範意識や欲動統制能力などの自我機能や超自我機能のアセスメントが可能となるかもしれない。



【描画13】燃える自動車(分裂病男性38歳)

誇大妄想をもち、しばしば暴力的になる男性のFLT。
「燃えながら走る車を見たことがある」と述べたが、
筆者は不安を感じ、病棟スタッフに注意を促した。し
かし、数日後、男性は離院し、警察に保護された。



【描画14】戦国時代の火攻め(健常者男性23歳)

「火攻めの火」は、戦のなかで火の破壊力を意図的に利
用したものである。かつて時代の変革の際には、こうし
た「戦乱の火」があらわれた。火は「変革の象徴」であ
り、1つの時代の「死」は、新たな時代の幕開けとなる。

6. 火による変容・変革

最後に、火による「変容」あるいは「変革」についてみてみたい。すでに何度もふれてきたことであるが、この「変容」とは「内的な変容(心の変容)」をあつかう心理臨床の世界でも非常に重要なテーマであることから、改めて整理してみたい。

日本では、火は時代の「変革」を象徴するものと考えられてきた。火は「五行(木・火・土・金・水)」の1つであり、その役割は「各時代の変革を徴証する」(林屋, 1996) ことにある。わが国でも時代や歴史の変革は、戦乱の火のなかで進められてきた。「古代から中世の変革のなかに、さらに中世から近世への変革のなかに火は大きな役割」を果たしてきたことから、火は「変革の象徴」と言えるのである【描画14】。

しかし、この「変革」は、時代や歴史の変革に関するものばかりではない。清水(1974)は「秩序や時間の転換を画す印として、消火や再点火といった、火に関する行為が使われる」と述べている。つまり、火を消し、再点火するといった儀礼(火祭りなど)を通じて、日常性の惰性的衰微を再び活性化させたり(日常性の更新)、衰退し腐食した古い秩序を廃棄し、新たな秩序を創造しようとしてきたのである。このように、火は「日常性の変更という人々の願望を表現する手段」としても用いられてきたのである(清水, 1974)。

また、坪井(1974)は「火の転換原理」という言葉を用いて、火の変容する力について述べている。「火による全生命の復活、再生は、人間にとって特定の状態から特定の状態への転換であり、その火はまさに生命構造の原理である」と言う。しかも、この「火の転

換原理」が日本人の思考、行動の様式の基礎をなしていると考えている。

さらに、リース(1986)は、夢のなかにおける火の「変容する力」について強調している。以下に、リースの「火による変容」に関する記述の一部をあげる。

「火はもっとも元素らしい元素であり、もっともめざましい変容をもたらす力である。このことは魂の変化にも当てはまる」(なお、ここで言う「元素(エレメント)」とは、太古的なイマジネーションにおいて現れる「地」「水」「火」「空気」を指す)

「コントロールされた火はある形の存在から他の形の存在への移り行きを可能にするような、エネルギーを変容させる創造的な力であって、そのような火が生じる場所では古いものが変容させられ新たな形を与えられて、生命のエネルギーが死の眠りからふたたび目覚めることでもある」

これは夢のなかにおける火が、必ずしも「破壊」や「死」だけにつながるのではなく、「浄化」や「再生産」を引き起こす力をも有していることを意味している。心のなかの火は、象徴的なかたちで「心の変容」を推し進める場合もあるのである。

他にも、バシュラール(1938)は「火によってあらゆるものが変わるのだ。われわれはすべてが変わることを願うときに、火を呼ぶのだ」と述べている。

以上、火は「心」も含めたすべてのものの「変容」を引き起こすものと考えられている。われわれは「心の変容」を繰り返しながら成長し、自己実現へと向かっていく。したがって、心理臨床場面、特に夢や箱庭およびFLTなどの描画法のなかに表される火が破壊的な様相を示していたとしても、それは内的な変容を予兆するものであったり、心の変容を推し進めるための原動力を秘めているのかもしれないのである。

7. まとめ

FLTに表される火の意味を吟味し、クライアントの内的体験のあり方やパーソナリティ特性をアセスメントするには、そもそも「火」がどのような象徴的意味を有しているのか、われわれの心とどのような関連をもつのかについて、あらかじめ理解しておくことが必要となる。本論では、こうした理由から火のもつさまざまな機能や象徴的意味を民俗学や文化人類学、宗教、心理学および哲学などの幅広い領域に求め、整理することを目的としてきた。その結果、長い歴史のなかで、人々が火に読み込んできたさまざまな象徴的意味を見出すことができた。なかでも「性(生)」と「攻撃性(破壊性)」に代表される「火の二面性」や「火の媒介機能」および「火の変容する力」がもつ意味は、世界中に共通するものであり、しかも、これらはいずれもわれわれの心のあり方と深い関連性をもつものであることが分かってきた。

一方、こうした火の象徴的意味が、実際にFLTのなかにも表されるかどうかについては、【描画1~14】に示した通りである。火のさまざまな機能や象徴的意味を含め、おそらく原始時代から人類が火との関わりの中で体験してきたであろう内的感覚が、FLTのなかにも表される可能性が示唆された。ただし、本論では、これらのFLTにみられる火の意味について、描き手の描画時の状態や心理療法の流れ、あるいは筆者との関係などとの関連で考察するにはいたっていない。それゆえに、描かれた火がどのようなかたちで「火の二面性」や「火の変容する力」などを表し得るのかについては十分に言及できなかった。これについては、今後の研究のなかで詳しく検討していくつもりである。

しかし、FLTを用いてクライアントの内的世界に対する理解を深めようとする際に、「火の二面性」や「火の媒介機能」あるいは「火の変容する力」といった視点からながめることの意義は十分に示されたと思われる。「火の二面性」に関しては、FLTの火の様相が、本能的欲動（性的欲動と攻撃的欲動）の力動関係を表している可能性があるからである。また、「火の変容する力」については、FLTの火がクライアントの内的状態やパーソナリティの変容を象徴的に表す可能性があるからである。

また、火を描く体験そのものが、セラピューティックな機能を果たすことも考えられる。心理療法のなかでは、クライアントの内的な変容を通して不適応行動や症状が改善されたり、パーソナリティの成長が促される。こうした過程で、描画のなかではあるが「火の変容する力」にふれることによって、クライアントの内的な変容が促される可能性もあるのではないだろうか。この場合、FLTはクライアントの内的変容を促す「媒介者」となるのである。

最後に、歴史を通じて人類と深い関わりをもつ火であるからこそ、われわれの心の原初的かつ本質的な側面までもが、FLTのなかに表されることを信じて、今後もFLT研究を発展させていきたいと考えている。

引用文献

- Freud, S. 1905 *Bruckstück einer Hysterie-Analyse*. 細木照敏・飯田 真訳 1969
あるヒステリー患者の分析の断片. フロイト著作集, 5, 性欲論・症例研究. 人文書院,
276-366.
- Freud, S. 1932 *Zur Gewinnung des Feueres*. 木村政資訳 1969 火の支配について.
フロイト著作集, 3, 文化・芸術論. 人文書院, 97-501.
- Bachelard, G. 1938 *La Psychanalyse de Feu*. Gallimard, Paris. 前田耕作訳 1990
火の精神分析. せりか書房.
- 林 直樹 1990 境界例の精神病理と精神療法. 金剛出版.
- 林屋辰三郎 1996 変革のなかの火. 林屋辰三郎編, 民衆生活の日本史 火. 思文閣出版,
1-19.
- 飯島吉晴 1996 火による生活の変化. 林屋辰三郎編, 民衆生活の日本史 火. 思文閣出版,
117-156.
- 石部正志 1974 考古学からみた火. 大林太良編, 日本古代文化の探求 火. 社会思想社,
97-176.
- 石田 弓 1993 火のある風景描画法 (Fire in Landscape Technique) に関する臨床心理学的考察. 広島大学大学院教育学研究科修士論文. 未刊行.
- 石田 弓 1995 火のある風景描画法 (Fire in Landscape Technique) にみられる「破壊的な火」の意味するものについての一考察. 広島大学教育学部紀要第一部 (心理学),
43, 199-205.
- 石田 弓 1996a 火のある風景描画法 (Fire in Landscape Technique) における「風景画」の側面についての一考察. 広島大学教育学部紀要第一部 (心理学), 44, 149-157.
- 石田 弓 1996b 火のある風景描画法に関する基礎的研究 - 健常者と分裂病者の描画内容と描画形式 -. 臨床描画研究, XI, 214-237.

- 石田 弓 1997 気分障害者の火のある風景描画法 Fire in Landscape Technique に関する一考察. 徳島大学総合科学部紀要人間科学研究, 5, 1-13.
- 岩崎徹也 1979 攻撃性 - 精神病理の発生との関連をめぐる精神分析理論. 原 俊夫・鹿野達男編, 攻撃性. 岩崎学術出版社, 29-50.
- 河合隼雄 1977 昔話の深層. 福音館書店.
- 河野博臣 1977 生と死の心理. 創元社.
- 熊倉功夫 1996 料理と器. 林屋辰三郎編, 民衆生活の日本史 火. 思文閣出版, 157-191.
- リーキー, L. S. B.・アードレイ, R. 1972 中山義之訳, 文明と暴力 リーキー／アードレイ対談「人間この未知なるもの」. ダイヤモンドタイム社.
- 前田重治 1994 続図説臨床精神分析学. 誠信書房.
- 松前 健 1974 文献にあらわれた火の儀礼. 大林太良編, 日本古代文化の探求 火. 社会思想社, 177-211.
- 西口順子 1996 火・煙・灰 - 神仏の靈力をめぐって-. 林屋辰三郎編, 民衆生活の日本史 火. 思文閣出版, 193-226.
- 大林太良 1983 太陽と火. 太陽と月 =古代人の宇宙観と死生観=. 日本民俗文化体系, 第二巻, 小学館, 93-114.
- Riess, G. 1986 *Traumbild Feuer*; Walter - Verlag AG, Olten. 渡辺 学訳 1992 火の夢. 元素的な変容の力について. 春秋社.
- 笹本正治 1996 火を使うなりわい. 林屋辰三郎編, 民衆生活の日本史 火. 思文閣出版, 77-116.
- 清水昭俊 1974 火の民族学. 大林太良編, 日本古代文化の探求 火. 社会思想社, 11- 95.
- 新谷尚紀 1996 火葬と土葬. 林屋辰三郎編, 民衆生活の日本史 火. 思文閣出版, 227-269.
- 種田真砂雄 1979 攻撃性と象徴化機能. 原 俊夫・鹿野達男編, 攻撃性. 岩崎学術出版社, 187-230.
- 鎗幹八郎 1977 試行カウンセリング. 誠信書房.
- 鎗幹八郎 1988 ドーラの夢の臨床. 河合隼雄・鎗幹八郎編, 夢の臨床. 金剛出版, 233-245.
- 田中克彦 1974 火に関するものの語源. 大林太良編, 日本古代文化の探求 火. 社会思想社, 271-291.
- 千々和 到 1983 「誓約の場」の再発見. 日本歴史, 422号.
- 坪井洋文 1974 火の民間伝承 - その象徴と構造 -. 大林太良編, 日本古代文化の探求 火. 社会思想社, 213-269.
- 柳田國男 1944 火の昔. 定本柳田國男集, 第二十一巻. 筑摩書房, 149-276.
- 吉田敦彦・大林太良 1974 対談・火の神話とシンボリズム. 大林太良編, 日本古代文化の探求 火. 社会思想社, 293-316.

(2000年9月22日受付, 2000年9月29日受理)